

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

バルトとスラヴの狭間にて (3) : 我流バルト・スラヴ語研究顛末

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 幸和, Inoue, Toshikazu メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1545

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



バルトとスラヴの狭間にて（3）

—我流バルト・スラヴ語研究顛末—

井上 幸和

第3章 <転>

しがたい一研究者の遍歴を辿るだけとはいえ、時間だけは40年に垂んとするその道程を四半分にして振り返っているのであるが、第1章、第2章の薄っぺらさに我ながら愕然としている。いくら引き延ばしても、これ以上にはならない。つまりは正味かそれ以下である。40年を何に擬えてもよい。人の一生の過半ではあるが、振り返ってさほどの感慨もない。もっとも衝撃的であるのは、あと40年、何をするのでもなくただ生きることも不可能だということである。その意味ではたった一度の40年間であったわけである。この40年は、また、頭としっぽを切り取った正味の人生＝研究生活でもあった。記憶のかなたの最初の10数年、またこの後どれほどなのか、いずれも計算の外であり、ましてや今の意識が持続する保証はどこにもないので、直ちに<清算>と言われても、文句の言いようがない。

<転機>とは、一体何で、いつ頃のことだろうか。研究の始まりと終わりの間を、例えば今言った40年とすれば、本稿の<起>と<承>で20年、<転>と<？>とで後の20年、ということで、数字の上ではほぼマラソンの往路と復路である。しかし、マラソンがそうであるように、往路の20年と復路の20年は、内容が全く異なる。生物年齢に対応させれば、往路は20代から40代、復路は50代から60代ということになり、そのほうがより現実味を帯びてくるであろう。もちろん、余裕なくガムシャラな前半と、多少周囲が見えてきてゆったりと構えることのできる後半、という捉え方もできなくはないが、今から思えば、折り返し点は30代の終わりころ、あるいはせめて40代の早い段階であるのが理想であるように思える。もちろん、人文科学においてである。60を過ぎてますます盛んというのは、少なくとも筆者には考えられない。年を経るほどに「円熟する」などとも言われるが、これも筆者にはまったく感じられない。こんなことも知らずにいたのか、という苛立ちと焦りが、年々、増してきている。

<転機>は、また、意図して作らなければならない。振り返って、あの時が<転機>であった、ではとても完走は望めない。復路に多少の余裕を残すためにも、折り返し点を意識して<転>そして<？>に持ち込まねばならない。筆者はそのタイミングを逸した。体力気力の衰えにもまして、予期せぬ外的負担

によって、数年間のロスをして、それが結果的に致命傷になってしまった。「ひたすら研究に明け暮れた、研究三昧の在職期間」とはしばしば耳にする追想の言であるが、筆者はそれを眉唾としか思わない。敢えて言えば、職務怠慢である。大学という職場は、研究三昧の者に毎月の報酬を与えるほど能転気なところではない。大学における報酬は、日々の肉体労働と、一部、精神労働に対する対価である。何の役にも立たない貧相な研究に対する報酬と勘違いしている者は、傲慢の極みである。そもそも、報酬に見合うだけの研究成果を示している者が、どれほどいるであろうか。単純計算で、1日1ページ書けば、40年で500頁の単行本30冊になる。実際、40年ほどの執筆活動をした小説家であれば、全30巻ほどの全集を残している。小説と研究は異なる、と反論するかも知れない。もちろん、違う。研究は同じことを手を変え品を変えて書くだけであるが、小説は常に新たなテーマとストーリーで書かねばならない。また、研究はほとんど誰も読まないが、小説は読まれることを前提としている。ともかくも、創作以上に研究の成果は、まずは量で計られる。たった一本の短い論文が研究史に決定的な影響を及ぼすなどということは、天才の世界の話である。凡人が表面的に研究者を標榜して認知されたいのであれば、まずは量である。その中に光るものが結果的に1、2あれば、万々歳であろう。かく言う筆者であるが、標準的基準と定めた＜量＞に関して、もちろん、はるかに到達していない。そして、挽回の余地も全くない。ここが最も重要である。反省は挽回の可能性のあるうちにこそ意味がある。挽回の可能性もなく、しかし学会（学界）において存在を誇示したいのであれば、もっぱら政治的に行動するしかない。曰く権威、曰く御意見番、はたまたお目付け役。これらほど若手研究者を潰す恰好の武器は無い。筆者も若いころ、日本の学会の陰湿さの被害を被った経験がある。学会活動に一貫して関心が無いのも、若い頃の苦汁に一因があるであろう。以上、自らに対する戒めを兼ねた、学問観、研究者観である。

ともあれ、筆者にとっての遅まきの＜転機＞は、ふとしたことで到来した。ただ、それを＜転機＞と称するのは、そうとでもしなければ区切りがつかないだけで、内心忸怩たるものがあるのだが。前稿でも触れたように、当初、バルト語研究の最初の一步のつもりで始めた古プロシア語研究に関しては、独自の分野を開拓すべく、試行錯誤の中でその糸口らしきものも見え隠れしてきた。ただ、あまりに多くの時間を要してしまった。時間が限りなくあると錯覚するのは、若さゆえである。ほぼ平行して進めたつमりのリトアニア語の方は古プロシア語の「教理問答書」研究と対比した、つまり同様の研究方法を試みたところまでは順調であったが、より広範な研究が可能なのはずにも拘らず、新規の研究の手がかりさえ見つけ損ねて、こちらもいたずらに時間だけが過ぎていっ

た。従って、バルト語研究と言っても、実際に扱ってきたのは上記のように、古プロシア語の第3カテキズム（エンキリディオン、すなわちルター小教理問答書）とその他の若干の言語資料の研究、そして古リトアニア語の「ルター小教理問答書」¹の断片的な研究に過ぎず、駆け出しの＜起＞の時期ならいざ知らず、＜承＞から折り返しの頃ともなると、さすがに焦りを感じ始めた。とは言っても、相変わらず新しい発想は望めず、唯一、妄想的に考えついたのが、バルト3言語の文献学的比較対照研究であった。もっとも、古プロシア語は措いても、リトアニア語およびラトヴィア語の残存する言語資料は膨大であり、あれこれの言語文献を駆使してのバルト3言語の比較対照研究など望むべくもない。そこで、身の丈にふさわしい構想として、偶々古プロシア語とリトアニア語に共通の言語資料であるルター小教理問答書を曲がりなりにも扱ったことでもあり、もし、ラトヴィア語にも同様の言語資料があれば、3者を並べて何がしかの比較対照研究をすれば、バルト3言語の古文獻の比較対照研究になるのではないか、とまことに虫のよい発想である。ただ、それまでの怪しい知識では、そううまくは事が運ばないであろうとも覚悟していた。まずはラトヴィア語の言語資料の中に、古プロシア語と（古）リトアニア語に共通の翻訳文献としてのルター小教理問答書の翻訳が無いものかと、探すことから始めた。以下、1586年刊のラトヴィア語訳ルター小教理問答書の存在を知り、その古い活字出版の複写を入手し、さらにはそのファクシミリ出版の複写を幸運にも入手することができるまでを辿り、そののち、筆者自身による拙い校訂テキストと一風変わった(?)語彙集を出版したところまでを述べる。

筆者の場合、これまでもそうであったが、この度もまた、すべてが偶然と幸運の賜物であった。結果として、この章の成立を可能にする産物が得られたのではあるが、それが決して周到な文献探索の結実でないことは、これまでの筆者のバルト語研究全体を通じて言えることで、事始めから多少の紆余曲折を経て最終章まで、もう一度やり直せと言われても不可能なくらい、いくつもの偶然と幸運の上にかろうじて築かれたものである。

糸口は、次の著作の一節であったと記憶している。Die baltischen Sprachen. (R. Eckert, E.-J. Gukevičiūtė, F. Hinze ed.) は、バルト3言語の研究入門として極めて手頃な案内書であるが、その53頁:

Das erste lettische gedruckte Buch ist der katholische katechismus („Catechismus

1 いわゆるヴィレンタス訳ルター小教理問答書 (Vilentas' Enchiridion) で、モズヴィダス訳のカテキズム (Mosvydas' Katechismus) とならんで、古リトアニア語資料の中でも最も研究されているものである。つまり、扱い易いわけである。

Catholicorum“) erschienen 1585 in Vilnius. Der Übersetzer dieser Schrift aus dem Deutschen ins Lettische ist E. Tolgsdorff (1550-1620). Die sprachliche Grundlage gab ein mittelleltischer Dialekt ab. Edition in: A. Günther, ASF.

Ein Jahr später, 1586, kam in Königsberg „Der Kleine Catechismus von M. Luther, nun aber aus dem Deudschen ins Vndeudsche [d. h. ins Lettische-R. E.] gebracht“ heraus, Edition: A. Bezzenberger, „Litauische und lettische Drucke des 16. Jhs“, II, S. 1-30.

この引用の前段はラトヴィア語に翻訳された「カトリックのカテキズム²」に言及したものである。探索の対象である「ルターのカテキズム（教理問答書）」とは別物である。ただ、ラトヴィア語訳の「教理問答書」は1年を前後して、「カトリックのカテキズム」と「ルターのカテキズム」が出版されたので、すぐ次のパラグラフに翌1586年ケーニヒスベルク刊の „Der Kleine Catechismus von M. Luther“ に関する情報が見つかった。後で見直せば当然と言えば当然の記述とその順序であるのだが、最初に「発見」したときは、偶然と幸運が同時に訪れたかのような感があった。原文において、「カトリックのカテキズム」と「ルターのカテキズム」のどちらに重点があるのだろうか。どうやら、連続して翻訳出版されたことに、多少の意味があるようでもある。しかし、筆者にとっては、後段の「発見」にすべてがあった。ともかくも、この後段の記述を手掛かりに首尾よくルター小カテキズムのラトヴィア語訳のファクシミリ（複写であるが）および活字印刷版を手にするようになるのであるが、その前に引用の前段にまつわる文献上のコメントをしておく。

前段に引かれているのは1585年出版のカトリックのカテキズムであるが、その写真版の複写を容易に見ることができることを知った：

A. Günther, *Altlettische Sprachdenkmäler in Faksimiledrucken*, 1-2. Heidelberg 1929. この本自体、ラトヴィア語を研究している畏友から複写で提供されたものであるが、しばらくは利用の目途もなく、開いてみることもなかった。ラトヴィア語訳のルター小教理問答書の存在が気になりだした時、はじめて内容を検討してみ、一つの事実に気が付いた。まさに上記の引用に関連するが、引用の前段に挙げられている1585年のカトリックのカテキズムのファクシミリを見るこ

2 リトアニア語の場合と同様、ラトヴィア語にも共通するのは、最古層の残存言語資料の中心を占めるのが、カトリックとルター派のカテキズムであるということである。或る意味で対峙する宗派であるはずの両派のカテキズムが両言語においてほぼ時を同じくして（16世紀後半に）翻訳された宗教的背景は、一考の価値があるかも知れない。なお、古プロシア語にはルター・カテキズムの翻訳しかないが、そのことに特に意味は無い。それしか翻訳されなかったか、残存するのがそれのみであるのか、いずれにしても不明である。

とができるのである³。第1巻、243–312頁に涉って掲載されている。当然と言えば当然で、Günther のこの著作は、16–17世紀の古ラトヴィア言語資料のファクシミリ版を掲載する珍しい出版物で、まさに16世紀の言語資料の代表として1585年のカトリックのカテキズムが掲載されているのである。参考までに、Günther の2冊に掲載されているファクシミリ版の古文獻のタイトルなりとも再掲しておこう。

第1巻

1. Das Evangeliarium des Georg Elger vom Jahre 1672
2. Der Katechismus des Petrus Canisius vom Jahre 1585

第2巻

1. Wörterbuch und Phraseologie des Georg Mancelius vom Jahre 1638
2. Mancelius' Übersetzung der Sprüche Salomons vom Jahre 1637

いずれも重要な古ラトヴィア語の言語資料で、その意味で Günther の著作は一次資料として利用することのできる貴重なものであろう。と、このような紹介で終わればごく普通の解説文になるが、上の目次を見て直ちに分かるように、先の引用の後段に紹介されている1586年のルターのカテキズムは、影も形もない。1585年のカトリックのカテキズムを掲載したので、翌年の、すなわち言語資料としては全くと言って良いほど同年代のルターのカテキズムは、掲載の意味がなかったということであろうか。あるいは、何か、他の理由があったのかかもしれないが、いずれにしても掲載されていないことは事実で、筆者のような観点から1586年のルターのカテキズムを探していた者からすると、誠に残念な結果となるのである。もし、それが掲載されておれば、ファクシミリ版の探索も解決したことになるのである。ともあれ、他を探すしかない。

先の引用の末尾に、Bezenberger 編で1586年のルター・カテキズムの出版が、19世紀のものであるが存在するとのことであるので、Günther の著作の複写を提供された上述の畏友に、何かの折に相談したと記憶している⁴。偶々、畏友の友人がオランダのライデン大学に留学中であつたことで、問い合わせてもらえることになった。すると、早速にコピーが送られてきた。

A. Bezenberger, hrsg. Litauische und Lettische Drucke des 16. Jahrhunderts. Göttingen 1874-1884.⁵

の第3巻に掲載されている活字印刷の Der lettische Katechismus vom Jahre 1586.

3 パラグラフ末尾の AFS が Günther のこの著作を略したものであることが、後になって判った。

4 このあたり、記憶が曖昧なので、敢えて畏友の名前を出していない。

(pp. 1-30)、すなわちルターのカテキズムのラトヴィア語訳の活字印刷本である。一番目の幸運である。文字どおり、飛びついた。ルターのカテキズムは、内容はドイツ語原文、その日本語訳、あるいは古プロシア語訳、古リトアニア語訳を扱った経験から、古いラトヴィア語自体は全くの手探りではあるが、大体の見当をつけることができると錯覚して、さっそく読み解き始め、半年ばかり費やしたであろうか、一通り見終えて、テキストとして不明の個所あるいは疑問の残る個所も一通りチェックし終えた。ただ、何かにまとめるほどのものではなかった。いつしか、この活字本の基になった1586年版のファクシミリ版を見ることはできないかと、欲張り始めた。実際、ファクシミリ版を見れば解消することのできる活字版テキストの疑問点もいくつかあった。Güntherの1585年版カトリックのカテキズムのファクシミリを見ていたことも、そのように思い始めた理由であった。そして、事態の展開は思わぬ機会に思わぬ形で呆気なく実現することとなった。

1996年の10月3-6日、ポーランドはクラクフのヤゲウォ大学で、第2回プロシア語学会 (Colloquium Pruthenicum Secundum) が開催された。第1回は1991年に開催され、後ほど主催者から発表論文集⁶が送られてきて、欧米の著名な古プロシア語学者が一堂に会した学会であったことを知った。第2回の開催案内と論文発表の申込受付をもらい、思い切って参加することにした。学会発表自体は古プロシア語に関係するものがほとんどであり、本稿とは直接に関係しないが、この学会に参加したことによって、思わぬ幸運—しかも2度目の—を得たことが、本稿<転>の実現に欠くことのできないものとなったことを書いておかねばならない。

海外の学会は初体験であった。参加者は、ポーランドをはじめドイツ、イタリア、オランダ、スイス、ロシア、ウクライナ、リトアニア、ラトヴィア、エストニア、そして米国とあちこちからであるが、それぞれ1-3名ほどで、つまりは一国に数名程度しか古プロシア語研究に従事する者がいないということ

5 全4巻で、後にすべての複写も送っていただいた。すべて活字印刷であるが、出版年も古く、珍しい出版物であるので、各巻に掲載されている古いリトアニア語とラトヴィア語の言語資料の名称なりとも再掲しておこう。第1巻: I. Der litauische Katechismus vom Jahre 1547. 第2巻: II. Der lettische Katechismus vom Jahre 1586. III. Das litauische Taufformular vom Jahre 1559. IV. Anhang: Das (angeblich altpreussische) lettische Vater-unser des Simon Grunau. 第3巻: Bartholomäus Willent's litauische Uebersetzung des Luther'schen Enchiridions und der Episteln und Evangelien, ... 第4巻: Szyrwid's Punkty Kazań (Punktay Sakimu) vom Jahre 1629.

6 Colloquium Pruthenicum Primum. Papers from the First International Conference on Old Prussian held in Warsaw, September 30th- October 1st, 1991. Warszawa 1992. なお、この学会、第3回の案内まではあり、開催されたと思われるが、その後については知らない。

である。総勢30名ばかりでそのうち半数が発表者でもあった。研究発表とそれに対する質疑応答は真剣そのもので、日本の学会でよく見受ける「馴れ合い」めいたところは微塵もないが、中休みのコーヒー・ブレイクや最終日のフェアウェル・パーティーは誠に和気藹々としたもので、筆者などはほとんど全員が初対面であったにもかかわらず、たちまちのうちに打ち解けて話が弾んだものであった。

コーヒー・ブレイクでラトヴィア大学の Pēteris Vanags 氏と話している中で、ルターの小教理問答書のラトヴィア語訳に話が及び、そのファクシミリ版は出版されているのかどうかを尋ねると、即座にイエスの返事で、そのうちコピーを送ってあげるよ、とのことだった。半信半疑であったが、住所を知らせてその場の話は終わった。

余談であるが、バルト語研究者は総じて懇切で人当たりもよい、というのがこの学会も含めてこれまでに接してきた大半の人々から受けた筆者の印象である。(一見、気難しそうなドイツの先生も含めて。) 例えば、リトアニア語学およびバルト語学の頂点に位置していた V. Mažiulis⁷もその典型で、筆者の書いたものを送ると、その名の通り⁸米粒のような小さい文字で礼状をくれたり、ご自身の著作にも丁寧にサインを入れて送ってくれたりした。アカデミー・リトアニア語研究所の A. Sabaliauskas も、顔は厳ついですが、Mažiulis に輪をかけた好人物であった⁹。この学会で初めて出会った Vanags 氏も、会ってすぐに好人物であると直感した。案の定(疑ったわけではないが)、帰国後程無くして、Vanags 氏からルター小教理問答書のラトヴィア語訳(ファクシミリ出版)のコピーが送られてきた:

Enchiridions. Mārtina Lūtera Mazais Katķisms no vācu valodas tulkots. Ķensberga 1586. Rīgē 1924.

がそれである。これで、いずれも複写ながら、ラトヴィア語訳のルター小教理問答書の校訂活字出版とファクシミリ出版が手許に揃ったことになる。すでに古プロシア語訳の校訂活字版とファクシミリ版、ならびにリトアニア語訳の校訂活字版とファクシミリ版もあるので、翻訳テキストではあるがバルト3言語のほぼ同時代のテキストに基づく比較対照研究を行うことのできる材料が整ったのである。しかし、それはまだ実現していない。その言い訳も本稿の目的で

7 筆者の最初の出版物である『古プロシア語書記論』に対する書評を書いていたのも同氏である。本稿第2分冊参照。

8 余計な情報であるが、リトアニア語の形容詞 *mažas* と同じ語根である。

9 お二人にはすでに1990年にヴィリニウスでお会いしていた。なお、過去形で書くのは、単に20年以上前に一度お会いしたきりであったからである。現在もご存命であると思う。

ある。

Bezenberger の活字版と照らし合わせながらファクシミリ版を改めて見直していくうちに、Bezenberger の読みとは異なる個所があちこちに見えることに気付いた。そこで、より客観的に観察するために、Bezenberger の活字版をいったん伏せて、ファクシミリ版を直接に翻字し直した。片手間の作業でもあり、案外と手間取って、1 年以上を要したであろうか。Bezenberger の読みと筆者の読みとを対照する準備が出来た。筆者の読み違いは、Bezenberger の読みによって修正でき、一方で、明らかな Bezenberger の読みの間違いをかなりの程度の確信を以って指摘することもできる。これは一つの成果になるかと、とりあえず安堵していたところに、N. Ostrowski から書簡が届いた。Ostrowski は上記のプロシア語学会で面識を得たが特に親しく話したわけでもなかった。当時、まだ大学院生風で、学会の主催者である W. Smoczyński 教授の弟子のようであった。その後間も無くして、Poznań のアダム・ミツケーヴィチ大学の専任になったようである。そして、書簡の内容は、同大学の Michał Hasiuk 教授の 70 歳記念論文集に投稿しないかという誘いであった。どうやら学会参加者リストに基づいて依頼してきたようである。筆者はこういった誘いにこれまであまり応えられなかったが、このときは偶々、上記のように、ラトヴィア語訳ルター小教理問答書の原テキストの読みに関して、最初の校訂者である Bezenberger の読みとの異同を纏める材料が整っていたので、締め切りまでさほど猶予も無かったが、投稿を約束してしまった。投稿論文は 'Некоторые заметки к изданному Беценбергером тексту латышского Катехизиса 1586 года' として無事掲載された¹⁰。

読みの異同をこのような形で論文にしてしまうと、さらに欲が出て、いっそのこと、Bezenberger の向こうを張って、筆者自身による校訂テキストと、Bezenberger には無いグロッサリーを作成しようかという気になった。それはそれで意味のある作業であるが、この方向転換が、バルト 3 言語の古文献の比較対照研究、それもルター小教理問答書のバルト諸語訳に限定した比較対照研究を、文字通り「絵に描いた餅」にしてしまった。いや、さらに先の作業としてしばらく延期ということではいはずなのだが、本稿の最終章＜？＞で打ち明けるように、すでにその意欲、気力さえをも失うことになるのである。

バルト諸語の古い言語資料の出版には、種々様々の体裁のものがある。バルト語に限った事情ではないのであるが、筆者自身、先に古プロシア語の言語資

10 MVNERA LINGVISTICA ET PHILOLOGICA MICHAELI HASIVK DEDICATA. EDENDA CVRAVERVNT Józef Marcinkiewicz et Norbert Ostrowski. Poznań 2001. 所収。

料の一つを活字版で出版した経験があり¹¹、今また、古ラトヴィア語の言語資料を新たな体裁で出版しようとしている段階であるので、この際、主要なバルト言語語資料の出版形態を「ルター・カテキズムの翻訳」に限定して概観しておくことにしよう。

古プロシア語訳のルター・カテキズムは、残存する古プロシア言語語資料の中では、伝統的に、第3カテキズムと呼ばれている。J.S. Vater, *Die Sprache der alten Preussen*. Halle 1821.¹² および G.H.F. Nesselmann, *Die Sprache der alten Preußen*. Berlin 1845. に掲載されたテキストが、恐らく最初期のものであろう。E. Berneker, *Die preussische Sprache. Texte, Grammatik, Etymologisches Wörterbuch*. Strassburg 1896. および R. Trautmann, *Die altpreußischen Sprachdenkmäler*. Göttingen 1910. の両著作は、20世紀を通して最もよく利用されてきたものである¹³。以上はすべて、活字印刷である。古プロシア語の全テキストの写真版は V.Mažiulis によってはじめて出版された。Prūsų kalbos paminklai. Vilnius 1966. である。対訳形式に印刷されたドイツ語原文も、もちろんそのまま掲載されている。1981年には、第2巻に当たる V.Mažiulis, *Prūsų kalbos paminklai, II*. Vilnius 1981. が出版された¹⁴。第1巻の活字印刷版にあたるが、テキストはドイツ語、古プロシア語、リトアニア語が3行1組になっている。語と語の対応も明確に表示されている。翻訳テキストを翻訳源と忠実に対応させ、さらに逐語訳を並べるといふ、これまでには無かったであろう体裁になっている。(注12参照。) なお、ここに並べるのもおこがましいが、筆者は、古プロシア語のルター・カテキズム(エンキリディオン)の語彙と語形式を出現頻度並びに出現箇所を示して語彙集として出版した¹⁵。

リトアニア語訳のルター・カテキズムは、ヴィレンタス訳が最も古い。活字

11 A Graphonological and phonological Study of Old Prussian Enchiridion. With the Critical Text. 外国学研究 XV (1984). 神戸市外国語大学外国学研究所。なお、ここでは添付のテキストに言及しているが、本研究は、前々年(1982)に同じ刊行物の Vol.XIII として発表した A Graphology of Old Prussian: Enchiridion と併せて、古プロシア語の主要言語資料である第3カテキズム(エンキリディオン=ルター小教理問答書)の書記論並びに書記素論である。本稿第2章(第2分冊)掲載の書評を参照。

12 この著作に掲載されているテキストは大変興味深い体裁をとっている。すなわち、テキストの行間に対応するドイツ語の単語が正確に宛がわれている。いわゆる interlinear text である。Trautmann にも掲載されている元の印刷形態である見開き対訳のドイツ語(左頁)と古プロシア語訳(右頁)は必ずしも原文とその忠実な訳の関係にはなっていないので、その意味では、Vater のテキストは貴重である。なお、後述の Mažiulis による活字印刷テキストを参照。

13 特に後者のテキストは、その印刷頁と行数が、論文などで取り上げられる古プロシア語の単語や語形式の所在を示すものとして用いられることもあったほどである。

14 Mažiulis にして、活字版の出版には15年ほどを要した。もちろん、1981年版を見ればその必要年数も理解できる。

印刷版は、先に紹介した **Bezenberger** の第 3 巻¹⁶が最初のものである。G.B. Ford, Jr., *The Old Lithuanian Catechism of Baltramiejus Vilentas* (1579). The Hague/Paris 1969. は、ヴィレンタス訳ルター・カテキズムの文法記述（音韻・形態・統語論）で、テキストのファクシミリ、活字版、および翻訳を付した、自己完結的な一巻である。

ラトヴィア語訳ルター・カテキズムの活字版およびファクシミリについては既に述べたところである。

以上、バルト 3 言語に翻訳されたルター・カテキズムの出版物を列挙したが、これらは、筆者が新たにラトヴィア語訳ルター・カテキズムの校訂テキストを提出する上で、その構成のモデルとして参考にしたものである。筆者はテキストのファクシミリと活字版とを少なくとも掲載したいと考えていた。そのためのモデルとなるのは、**Mažiulis** の 2 冊と **Ford** によるヴィレンタス訳のテキストである。**Mažiulis** は、ファクシミリ版と活字版が別冊になっているので、場合によっては両者を並べて対照することができる。一方、**Ford** の方は、1 冊の中にファクシミリ版と活字版を収めている。一見便利なようであるが、両者を見比べる段になると、はなはだ手間である。印刷技術上の制約¹⁷もあったのであろうが、筆者としてはこの不便は避けたい。なおかつ、筆者に許されているのは 1 冊本である。対照の便を考えて、見開きの体裁を選択した。なお、ドイツ語原文もできれば組み入れたいと考えていたが、3 者を見開きの体裁にするのはかなり無理もあり、断念した。とりあえず、左頁にファクシミリ版、右頁に筆者の校訂による活字版、右頁欄外に **Bezenberger** 校訂との異同を提示する、という体裁で、かなり見やすいものになったと自負している。ドイツ語原文を併記できなかった代わりに、テキスト中に現れるすべての語形式をグロッサリーとして巻末に掲載した。ただし、単語形式に文法情報を的確に記入するだけの能力は、筆者には無かった。

こうして出来上がったのが、Латышский перевод лютеранского Малого Кате-

15 Нормализация прусского языка Энхиридиона. Том 1. Нормализация словаря. 1992. 研究叢書第22冊（神戸市外国語大学）。本書で筆者は「標準化」という処理を施したが、ここでは詳説しない。なお、第1巻とあるように、数年の間隔で「標準化」テキストと「標準化」文法を提出して、全3巻のエンキリディオンの言語研究とするつもりでいた。ところが、第1巻を出した後、この出版物の発行規定が変更になり、同一人が10年間は執筆できないことになった。筆者の研究計画が大きく崩れた遠因ではある。

16 *Litauische und Lettische Drucke der 16. Jahrhunderts*. 3.

17 **Mažiulis** の第1冊（ファクシミリ版）も **Ford** のファクシミリテキストの部分も、紙質が活字印刷の部分とは異なる。それが意図的であるのか、あるいは技術上の問題であったのかは不明である。

хизиса 1586 года. Критическое издание текста и Глоссарий. 2002. 研究叢書第33冊 (神戸市外国語大学) である。ファクシミリ版の複写を送ってくれたラトヴィア大学の Vanags 氏が通り一遍ではない書評を書いてくれた¹⁸。＜参考＞参照。書評における批評的的は、筆者によるテキストの読みと、グロッサリーの不備に集中している。前者については、今なお、Bezzenberger の読みより筆者の読みの方がファクシミリに忠実である部分があると思っている。後者は、それぞれの語形式の基本形を、それぞれ ME¹⁹および EH²⁰と略したラトヴィア・ドイツ語辞典を用いて手探り状態で捜したものであるもので、多くの誤謬、誤解の丁寧な指摘はありがたいと同時に、慣れない言語を扱ったばかりに、大火傷寸前にまで至ったことを思い返すと、今でも冷や汗が出る次第である。

第3章として書き残しておきたいことは、以上のほか、何も無い。我ながら、この10年ほどは、前進も収穫もほとんどなかったことは事実で、無理やり言い訳を探せば、外圧的な精神的負担の大きかった時期が重なるのであるが、それは言っても仕方のないことかもしれない。

2012年9月 (未了)

付録

[Baltu filologija XI (2) 2002, Riga 2003 (pp. 107-109)]

Latyšskij perevod l'juteranskogo Malogo Katexizisa 1586 goda. Kritičeskoe izdanie i Glossarij. Sostavil Toshikazu Inoue. Kobe: Institut inostrannyx jazykov g. Kobe, 2002. 169 s. (Studia Baltico-Slavica 3).

Latviešu valodas izpētei gan sinchroniskā, gan diachroniskā aspektā nu jau vairākus gadu desmitus pievēršas valodnieki ne tikai tradicionālajās baltistikas zemēs Eiropā, Amerikā, kā arī Austrālijā, bet arī Austrālijā, bet arī tādā, no mūsu viedokļa raugoties, tālā zemē kā Japāna. Un viens no šiem pētniekiem ir Kobes svešvalodu institūta mācībspēks Tosikadzu Inoue. Viņa uzmanības centrā ir agrīnie Lutera Mazā katechisma tulkojumi baltu valodās. 1992. gadā viņš izdevis 1561. gada prūšu katechismu jaunā apstrādājumā (Inoue 1992). Tagad kārta 1586. gada latviešu izdevumam. Pēc tam droši vien sekos arī Baltramieja Vilenta 1579. gada lietuviešu

18 残念ながら筆者自身、この書評のラトヴィア語の正確な読みができない。古いラトヴィア語のテキストを扱っておきながら、現代ラトヴィア語がほとんど読めないという、お粗末ある。

19 Mühlénbachs, K., Lettisch-deutsches Wörterbuch. Redigiert, ergänzt und abgeschlossen von J. Endzelin. I-IV. Riga, 1923-32.

20 Endzelin, J. und E. Hausenberg, Ergänzungen und Berichtigungen zu K. Mühlénbachs lettisch-deutschen Wörterbuch. I-II. Riga, 1934-45.

tulkojums. Jāpiebilst, ka autors latviešu tulkojuma analīzei jau veltījis arī rakstus periodikā (Inoue 2001).

Darba ievadā autors īsumā raksturojis Luterā Mazā katechisma agrīnos tulkojumus baltu valodās, kā arī sava pētījuma galveno mērķi – veikt trīs tulkojumu salīdzinošu analīzi. Pašreizējais izdevums ir zināms priekšdarbs. 3. – 6. lpp. autors raksturojis latviešu tulkojuma īpatnības salīdzinājumā ar tulkojumiem prūšu un leišu valodā. Būtiskākā atšķirība ir dažādie avoti – latviešu teksts atšķirībā no leišu un prūšu ir tulkots no lejasvācu oriģināla, ne no augšvācu izdevuma. T. Inoue, atsaukdamies uz šīs recenzijas autora habilitācijas darbu (Vanags 1998), raksturo to kā jaunu hipotēzi. Taču to jau krietni pasen bija izvirzījis Jānis Straubergs (1935, 1936). Tas, ka avots ir bijis lejasvācu valodā vairs nav apšaubāms. Meklējams vienīgi ir konkrētais tulkojuma avots, ja vien tāds viens vienīgs vispār ir eksistējis (sal. pārdomas šī jautājuma sakarā – Vanags 2000: 366).

T. Inoue ievadā (5.-6. lpp.) ļoti pamatoti aizrāda, ka nav īsti vietā bieži sastopamā kritika par agrīno tulkojumu valodu. Tie nav uzskatāmi par “verdziskiem”, bet par “neitrāli burtiskiem” tulkojumiem (*neutral'naja doslovnost'*), kas liecina par tulkotāja godprātīgu darbu, protams, 16. gadsimta kontekstā. No šāda viedokļa būtu vērtējumi arī citi 16. gadsimta teksti latviešu un prūšu valodā.

Par sava darba galveno uzdevumu autors izvirzījis 1586. gada latviešu luterāņu katechisma teksta kritisku izdevumu, kā arī tam pievienotu glāsojumu, kam kopā būtu jākalpo par pamatu turpmākajai salīdzinošai visu trīs baltu balodu agrīno izdevumu analīzei.

Grāmatā no 11. līdz III. lpp. atrodams 1586. gada latviešu katechisma daļas – t.i. īstā Mārtiņa Luterā katechisma –faksimils atvēruma kreisajā pusē ar paralēlu transliterāciju un lasījuma korekcijām atvēruma labajā pusē. Sākumā autors raksturojis oriģināla pagināciju, kas atšķiras no mūsdienās parastās, bet seko sava laika tradīcijai, kad norādītas tikai loksnes un lapas, bet ne lappuses. Lietošanas un apraksta vienkāršībai autors pieņēmis savu paginācijas sistēmu (1. – 48. lpp.), kas faksimilā norādīta kvadrātiekāvē.

Autora ieguldījums katechisma izpētē ir kritiskais teksta transliterējums, kur vispirms jau apkopotas visas savulaik Adalberta Becenbergera sniegtāspiezīmes un labojumi (Bezenberger 1875). T. Inoue tos reizēm komentējis, reizēm arī papildinājis. Šie komentāri neapšaubāmi atvieglo darbu ar tekstu, nav jāmeklē paralēli vairāk nekā pirms simts gadiem izdots Becenbergera darbs.

Dažos gadījumos tomēr var oponēt autoram vai vēlēt citu komentāru. Tā,

piemēram, 21, 3 <Estadiuuwme> skaidri būtu jālabo vismaz par <Estadiumme> (57. lpp.) 23, 10 <jsledtz> un 23, 20 <jsledtcz> būtu tā arī jātransliterē, taču autors aizstāj <j-> ar <i-> (61. lpp.). Tomēr glōsārijāir <jsledtcz> (132. lpp.). 24, 1 <gyr> transliterēts par <gir> (63. lpp.). 30, 3 oriģinālā ir skaidri <mylyx>, taču autors transliterē to kā <mylyr>, to pat akcentējot parindē (77. lpp.). 31, 21 ir skaidrs <treβetayes>, bet transliterēts ir <treβerayes> (77. lpp.). Savukārt 47, 22, šķiet, kairtieši <erkan>, bet lasīts tā, kā būtu gaidāms - <exkan> (109. lpp.). 33, 14 <wenn> 'vien', sekojot Becenbergeram, lasīts kā ,wenu> (81. lpp.), taču šāda precīza galotnes norāda nav īsti ticama 16. gs. tekstam. Vienkāršākais iedomājama labojums ir <wen>, kā rakstīts 15, 22 un 36, 4.

No 115. līdz 167. lpp. grāmatā atrodams visu katechismā sastopamo leksēmu glōsārijs. Vārdi rakstīti oriģinālformā ar norādi uz teksta vietu, papildināti ar atbilstīgi vācu tekstā, kā arī kvadrātiekvāsi sniegta pēc autora domām atbilstošā vai tuvākā vārda forma no ME vai EH. Principā atbalstot autora nostāju par tulkojuma paralēlu izpēti ar oriģinālu, šāda no konteksta izrauta vārdu citēšana reizēm var maldināt. Tā, piemēram, 152. lpp. līdzās vārdam <sirge> dota vācu teksta <Stärke>, bet 153. lpp. līdzās <stipprumee> - vācu <Rosses>, kaut pēc satura ir tieši pretēji! Tāpēc vērtīgāka būtu visu tekstu, ne vien vārdu paralēla norāde.

Kļūdas, diemžēl, gadās arī katechisma leksēmu sastatījumā ar ME šķirklju vārdiem. Daži piemēri. Aiz <arige> *äußerliche* dots ME *arīg*, kaut vajadzētu *ārīgs* (118. lpp.); <bedena> *dräuet* saistāms ar *biedināt*, nevis *bēdināt* (120. lpp.); <bherninges> *Kindlin* sastāms ar *bērniņš*, nevis *bērnīgs* (121. lpp.); <iedoma> *gibt* ir tagadnes forma no *ieduomāt*, nevis *ieduot* (127. lpp.); <klusse> *schweige* ir tagadne no *klusēt*, nevis *klust* (135. lpp.); <noyoutczeyam> *abspannen* ir tagadne no *nuojaucēt*, nevis *nuojūgt* (143. lpp.).

Saprotamu iemeslu dēļ norādes uz ME nav tad, ja vārds ir rēgulārs atvasinājums, rets darinājums vai neskaidrs. Taču arī diezgan daudzos pilnīgi skaidros gadījumos šo narāžu trūkst, piemēram, <astonems> - būtu *astuoņi* (119. lpp.); <czittade> - *citāds* (124. lpp.); <dotes> - *duoties* (126. lpp.); <klayas> - *klāties* (135. lpp.); <mheβle> - *mēsli* (140. lpp.); <pusses> - *puse* (150. lpp.); <saloulayo> - *salaulāt* (151. lpp.).

Glōsārijā iekļauti tikai vārdi, kas ir katechisma latviešu tekstā, un nav paskaidrojošo vācu tekstu vārdu. Tas arī saprotams, jo glōsārijs ir latviešu valodas formu radītājs. Tomēr dažos gadījumos autors sarakstā iekļāvis arī nav iesaistīti latviešu tulkojumā tekstā, bet ir virsrakstos vai paskaidrojums: <das> (125. lpp.); <etc.> (129. lpp.); <gratias> (131. lpp.); <item> (133. lpp.).

Dažas neprecīzītātes iezagušās laikam gan tikai veidojot glōsāriju, piemēram, 133. lpp. minēts <kadditimsletims> *Kreeturn*, kaut gan tekstā 28. un 29. lpp., gan glōsārijā pie vārda <lethe> (137. lpp.) ir rakstīts pareizi - <raddeitims>.

Tomēr kopumā glōsārijs ir ērti izmantojams un dod iespēju ātri atrast dažādus viena vārda vai atvasinājuma virknes variantus un formas. Tāpat sastatījums ar vācu tekstu ļaujlabāk izprast vārdu sēmantiku. Kamēr latviešu valodas seno tekstu korpusā (<http://www.ailab.lu.lv/senie>) vēl nav 16. gadsimta tekstu, T. Inoues sastādītais glōsārijs noteikti var kalpot par palīglīdzekli darbamar Luthera Mazā katechisma pirmo izdevumu latviešu valodā.

Neraugoties uz šīm kritiskajām piezīmēm, japāņu baltista Tosikazu Inoues jaunā grāmata ir ieguldījums agrīno latviešu tekstu tālākā izpētē. Cerams, ka drīzumā sekos gan prūšu 1561. gada katechisma, gan Baltramieja Vilenta leišu tulkojuma apstrādājums un visu trīs agrīno baltu tekstu salīdzinājums, kas varētu būt nozīmīgs veikums 16. gadsimta baltu rakstu valodas un tulkošanas prakses izpētē. Vēlēsim veiksmi japāņu kolēģim šai darbā.